

蕪木 寿江

積木のふたに書いてある

すごうひろしの文字……

めぐちゃんが見つけて 飛んできた

「えらい先生の名前が書いてある」って

いったい誰が書いたのだろう

この六歳の子どもたちの誰が……誰が……

みんなが頭をくつつけてじっと見ている

小さい丸い字で

ボールペンが少しかすれている



出 会 い

——ひばりはそらに——

わたし達があんまり悲しむから

いつの間にか先生の名前を

覚えてしまったのか

お母様方がその死を惜しむから

いつの間にか先生の名前が

離れなくなってしまうのか

親から子へ 子から子へ

生きつづけていく

すこうひろし

一人一人の幼い胸の中に 燃えつづけてい

く

すこうひろし

あ——二十一世紀の人

次の日の朝、真先きに部屋の隅に置かれてある床上積木のふたを取って抱き寄せた。話しかけているK夫<sup>\*</sup>の文字である。見なれたK夫の字だ——。ポールペンの先生は、「いたづらに動揺するんじゃない。私の指ではなくて、持し示す先を見なさい。肉体は滅びても精神（魂）は不滅である」と一所懸命に語りかけている。物にだけ執着する子どもとK夫を見ていたが、外見だけで心の動きを見ることができなかつたのか、とK夫に詫げる思いだ。卒園間近の三月八日のことだった。周郷先生が亡くなられたのが二月二十八日、市が



尾幼稚園でお話を拝聴したのが二月十四日、五回目のご講演で、ご父兄の間でも、「教育とは何なんだろう、人間とは——、生きるとは——」という真剣な自分自身への問いかけが続いていた。

先生を初めて知ったのは、先生がお茶の水女子大学附属幼稚園の園長を兼任なさった年（四十四年）の五月だった。当時、NHKで日曜毎に行なわれていた十時十五分からの、「十代と共に」という番組で、母の日にちなんで七、八人の高校生ぐらいの少年少女が先生を囲んで話をしていた。毎週見ていたのにその日に限って終る頃につけた画面に、

あなたは子供たちに愛を与えることはできるが、あなたのものの考えを与えることはできない。なぜなら、子供たちは子供たち自身のものな考えをもっているのだから。

あなたは子供たちのからだの世話をすること  
はできるが、彼らの魂をそっくり飼いな  
らすことはできない。なぜなら、彼らの魂は  
明日という住み家に息づいているのだか  
ら。

あなたは子供たちのようになろうとつとめて  
もよいが、子供たちをあなたのようにしよ  
うなどとしてはいけない。なぜなら、人生  
は後向きにすすんでいくものでもないし、  
昨日のままでもどまっているものでもない  
のだから。

左から浮きでては右に消えていく文字を急  
いで写した。周郷博訳、ペルシャの詩、とい  
う最後の白い字を追っていった。「父母であ  
ること」のこの詩が、「母と子の詩集」(國土  
社)にでているのを知るまでに一年余りかか

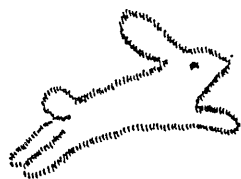


った。七百余年前の詩が、そのまま先生の教  
えであるような気がして機会あるごとに紹介  
してきた。その本から次々とふれ合うものを  
感じ、感性がよびさまされ、引きだされる思  
いだった。「迷える一匹の小羊も、自分が求  
めてさまよっていたから神さまは探して下さ  
ったのだ」という先生のお話と合わせて、四  
十三歳の迷える小羊ならぬ山羊は、その一つ  
一つの詩の心に傾倒していった。

次の出会は翌月、キンダーおはなしえは  
ん(フレール館)の六月号、吉田一穂(初  
山滋画)の、『ひばりはそらに』の中に入っ  
ていた解説書のような一枚の紙に書かれてあ  
った文章であった。

——略——何を讀んだらいいのか、何を子ども  
に読ませたらいいのか、この乱脈混乱の時代  
に、読書についても、道案内風なものには必要  
にちがいない。しかし、それは「あれやこれ

やの道」のことだろう。この「ひばりはそらに」に語られているのは、夜空にかがやく北極星を指さすような「この一つの道」をさし示す、人間の（人生の）大道を示す「道案内」の物語である。それは戦争に負けたとか高度経済成長で国民総生産が世界の第何位になったとかいう世間の浮き沈みで、いちいち左右されたりするものではない。昭和十六年、あの戦争の最中に書かれた、日本の詩人の中の詩人というべき吉田一穂のこの「ひばりはそらに」が、いま日本の精神的頹廃、滅亡寸前の教育の危機に、装いも新たに目の目をあびて日本の幼い人びとに（教師や父母に）送られることは、何者かの導きであるかのような驚きにつつまれて、私はそのことに深い「よろこび」を味わう。フランスのサン＝テグジュペリの「星の王子さま」が書かれたのも、悪夢のような戦乱が、ヨーロッパ世



界をおおった時期、一九四〇年（昭和十五年）にフランスがナチスに降伏して後、パイロットとしてしばらくアメリカに駐留していた同じ時期においてだった。吉田一穂の『ひばりはそらに』を無理に『星の王子さま』と関係つけて考えなくともよいかも知れないが、小さい物語ながら何か一脈通じるものが感じられる。そういう人間の、のっぴきならない状況の中でこそ詩人は、「生きる人間」のほんとうの姿を描きだすことができるのだと思う。例えば戦後二十三年、大学や幼稚園、保育所などが空前といってよいほどに大量につくられて、学校と教育とは大流行といった格好だけれども、いつほうデパートとともに、学校や幼稚園ができればできる程「いい気になった人間」が日ましにふえていく。学校や幼稚園ができて、そこで何やらもりだくさんにやっているらしいが、どこでも「生

きる」ということが「教えられ」てはいないのである。このまま流されていったら、いまに日本の子ども（大自然の子）は、せっかく生まれてきたものの、気がついてみたら、水気の枯れた（樹液の通わない）人造人間の類いになってしまっているかも知れないのである。教育も、テレビなどとともに、子どもを、「立ち枯れ病」にするために日夜すき間なく働いているらしい。おそろしいことである。こういう時機に、この『ひばりはそらに』が二十数年うもれたままできて、いませに出る。「きんぎょみたい」に生きているいまの私たちみんなが、目のうろこがとれて、目が覚める経験をするだろう。自分の心を発見するだろう。深々とした生の息づきをとりもどすだろう。幼い人びとと一緒に、「むねをはって、こえたかく、うたいながら……」この人生を生きていこう。四月から附属幼稚



園の園長になることになった私にとっても、この『ひばりはそらに』は、このうえないおくりものとなった。』

抜萃しようと思ひ、ペンをとめて考え、考え、結局それは耐えられず、始めの八行を除いてみんな書いてしまった。その年の夏、お茶大で行なわれた日本幼稚園協会主催の講習会で、初めて遠くから先生を仰いだ。いつもの壇上の講師とは異なり、左手を右の腕にそっとかけて恥じらいながらボソボソと語りかけるような声に、「ひばりはそらに」の小鹿の目を見るような気がして、音響効果の悪い講堂で必死に耳を傾むけた。滅多にない頭痛に襲われ椅子から立ちあがれなかったのは、窓が少く、（氷柱は三本あったが）人いぎれの為ばかりではなかったような気がする。

（市ヶ尾幼稚園）

\* 幼児の教育第二号よりその記録を記す